『水滸伝』百回本第一百回「自太宗傳太祖帝位之時說了誓願」の解釈

From Chapter 100 of the 100-chapter edition of the *Water Margin* (*Shuihuzhuan* 水滸伝), interpretation of the oath Taizong made when he succeeded to the imperial throne of Taizu

中野謙一
NAKANO Ken'ichi

キーワード：水滸伝・宋江・太祖誓碑

はじめに

本稿の筆者は、文学部国文学科の「国文学特殊講義　日本漢文学」という科目を数年来担当しており、そのなかで毎年度後期には日本における『水滸伝』の受容を扱ってきた。もとより中国文学の門外漢であり、担当科目も明清代の白話小説の講読を目的とするものではないから、『水滸伝』の本文は主に文庫本の日本語訳を用いている。それらの訳注のなかに容易ならざる問題点が見出されたため、浅学を顧みず、これを解決しようと試みるのが本稿である。

一

問題の個所は『水滸伝』の結末に位置するが、その文脈を理解するために、まずは作品全体として語るところをおおよそ捉えていきたい。

『水滸伝』百回本は、十六世紀前半、明の嘉靖年間までに成立していたとされる。[1] 百二十回本や七十回本は後出のテキストであるから、本稿では専ら百回本を考察の対象とする。ただし、百回本と一致するかぎりにおいて、百二十回本に関する言及を参照することがある。

高島俊男氏によれば、『水滸伝』を作ったのは「文人知識人たちのグループ」であり、筆力のまちまちな何名かが分担し書き継いでいったのだという。[2] そうしたものであっても、執筆開始の時点で「梁山泊強盗集団の生成、発展、潰滅という全体的なプロットを持つ長篇小説」の構想は存在したというから、統一ある作品として読むことは可能なはずである。

日本で最初に『水滸伝』の本格的作品論を展開したのは、曲亭馬琴であろう。馬琴は『水滸伝』の続編たる『水滸後伝』を批評した『半間窓談』（一八三一年）において、次のように述べている。[3]

……抑水滸傳に三等の深意あり、宋江をはじめとして、百八名の好漢等、初各々生出(ナリイデ)て、その身〳〵に事あるまでは、みな一般の善人なり、既に事あるに及びて、梁山泊に落草せしもの、文弱なるも、奸智殘忍、勇悍なるは、不仁暴行、一箇も悪魔に似ざるはなし、便是(スナハチレ)石碣魔君を走らせし、應報に緣(ヨ)るものにして、宋江といふといへども、魔行なきことを得ざる也、又かの替(テ)天行(ニフレ)道(ヲ)などいふことも、皆是魔心の誇言(コゲン)也、必しも信すべからず、かくて石碣天降りて、かれらが過世の業因を、料らず解脱せしにより、その面目を改めて、忠臣義士になれる也、か、れば一百八人に、初善中悪後忠の三等あり、

（評六）

梁山泊集団の生成段階では、「一般の善人」であった好漢が、何らかの事件にまきこまれて盗賊に身を落とす話が多い。発展段階では、如何に「替天行道」を唱えようとも、彼らは盗賊を業とし悪事を厭わない。ところが、石碣が天から降された後は、「各人存心不仁，削絶大義」[4]することなきを固く誓い、「共存忠義于心，同著功勲于國」を願うのである（第七十一回）。

もちろん、「初善中悪後忠」[5]という捉えかたで百八名すべてを説明しようとすれば、相当無理が生じることになる。たとえば「初善中悪」は、史進・魯智深・林冲ら、比較的早い回から登場する主立った好漢にはあてはまりそうだが、地煞星七十二名のなかには、初登場が山賊で「初善」のみえない者や、一貫して積極的には悪事をはたらかない特殊技能者などが少なからず存在する。

しかし、ここで確認しておきたいのは、不可解とされる宋江の人物像について、馬琴があくまで『水滸伝』本来の構想によるものとして説明しようとした点である。現在、そのような立場ではあまり考えられていないのではないか。

高島氏は、宋江を「腕も立たぬし頭も悪い」、「卑劣陰険」、「背が低くてふとって色が黒く、さっぱり風采のあがらぬ男」などと評したうえで、「宋江が総大将たるゆえんは、現在ある小説水滸伝のなかにではなくて、何百年の水滸伝成立史のなかに、さらにその成立史の劈頭にある、史上実在の盗賊宋江にあったのである」と論じている[6]。佐竹靖彦氏もほぼ同様で、「英雄豪傑らしいところがまったくない」、「水滸伝における宋江の人格が不可解であり、分裂しているのは（中略）水滸伝の成立の過程そのものを反映しているのである」と述べている[7]。いずれも、宋江を梁山泊の首領にふさわしからぬ人物とみて、それが豪傑たちの上に立つ理由を『水滸伝』の成立過程、つまり作品の外に求めているのである。

近年でも、井波律子氏[8]が、「〈及時雨（時にかなった慈雨）〉と呼ばれるように、義侠心に富み、もともと江湖（渡世、遊侠社会）で評判が高」いことを述べながら、「その実、宋江は反逆集団のリーダーらしくもなく、風采があがらないうえ、個人的武勇も今一つ」というのは、高島氏の見解とほとんど変わりがない。このように宋江の短所ばかりに目を向けてきたのは、「水滸伝を読んで宋江を理解しかれに共感を示すものは、ほとんど皆無であろう[9]」ともいわれるような、現代の読者の感覚によるところが大きいのではないか。『水滸伝』の描こうとする宋江について、あらためて考えてみよう。

二

眼如丹鳳，眉似臥蠶。滴溜溜兩耳垂珠，明皎皎雙睛點漆。脣方口正，髭鬚地閣輕盈；額闊頂平，皮肉天倉飽滿。坐定時渾如虎相，走動

時有若狼形。年及三旬，有養濟萬人之度量；身軀六尺，懷掃除四海之心機。上應星魁，感乾坤之秀氣；下臨凡世，聚山嶽之降靈。志氣軒昂，胸襟秀麗。刀筆敢欺蕭相國，聲名不讓孟嘗君。

（第十八回）

右は宋江の初登場の場面で、その人物像を描いた美文である。まず人相については、『三国志演義』巻之一「祭天地桃園結義」に「丹鳳眼，臥蠶眉」[10]とみえる関羽を思わせる表現をはじめ、容與堂本眉批が「太諛」（おべんちゃらが過ぎる）[11]というほど立派なものとなっている。また、外には虎や狼のごとき威容、内には広い度量と遠大なはかりごとを有し、天魁星に応ずる存在であるといい、後の活躍を予告する。さらに、意気は高く性質は麗しく、胥吏としての能力にすぐれ、名声を世に知られた人物であると語っている。

ただし、直後の地の文に「面黑身矮」とあるように、決して容姿にめぐまれてはいないが、「身軀六尺」と矛盾するわけではない。[12]『水滸伝』には、武大郎のように「身不滿五尺」（第二十四回）、郷里の人々からバカにされる者もみえるが、色男とされる燕青も「六尺以上身材」（第六十一回）、宋江と大差のない身長である。色黒はともかく、身長の方はさほど欠点とはいえない。要するに、容姿に多少難があろうともバカにされないような、堂々たる人物ということであろう。

虎狼に喩えられる点は、地の文に「愛習鎗棒，學得武藝多般」ということに関わるものであろうか。宋江の武芸については、実戦で発揮される場面はみあたらないが、孔明・孔亮を「因他兩個好習鎗棒，却是我點撥他些個，以此叫我做師父」（第三十二回）と武松に紹介しているから、少なくとも人に教えるほどの腕前だったことがわかる。閻婆惜殺害にいたる話でも、「原來宋江是箇好漢，只愛學使鎗棒，於女色上不十分要緊」「勇烈大丈夫，爲女色的手段却不會」（第二十一回）といった表現が繰り返されているように、武を愛する好漢という人物像はある程度固定されているのである。個人的武勇をふるう機会がないのは、特に弱いことを示すわけではなく、物語上の都合と考えられる。

これについては、高島氏が「一番上には、なんとなく茫洋としたのがいて、当人自身はあまり何もできず、実際の仕事は配下の強いのやかしこいのがテキパキとやることにしたほうが話がおもしろくなるわけだ」[13]と説明するとおりであろう。しかし、『三国志演義』の劉備や『西遊記』の三蔵法師が「すくなくとも善良な人物であり、また風采はりっぱである」のに対して、「宋江のばあいには、それすらないのである」という点には従えない。やはり『水滸伝』も、宋江を善良かつ堂々たる人物に描いているといわねばなるまい。前掲の美文に「志氣軒昂，胸襟秀麗」とみえるのは、地の文の「于家大孝，爲人仗義疏財」と対応するが、多々あげられる宋江の長所のなかでも、作品世界において特に重要なのが「孝」と「義」である。

宋江の「孝」なる様子が描かれた最初の場面を引いてみよう。

宋江讀罷，叫聲苦，不知高低，自把胸脯捶將起來，自罵道：「不孝逆子，做下非爲，老父身亡，不能盡人子之道，畜生何異！」自把頭去壁上磕撞，大哭起來。燕順、石勇抱住。宋江哭得昏迷，半晌方纔甦醒。

（第三十五回）

青州清風山に集った宋江らが梁山泊へ合流すべく向かう途中、父・宋太公の死を偽って帰還を求める弟宋清の手紙を読み、宋江は自らの不孝を責めて気を失うまでに激しく慟哭する。そして、燕順が「太公既已歿了，便到家時，也不得見了」となだめるのも聞かず、「既是天敎

我知了，正是度日如年。燒眉之急，我馬也不要，從人也不帶一個，連夜自趕回家」と言って飛ぶように立ち去るのである。

宋江が山賊に身を落とすことを恐れ、策を用いて呼び返した宋太公は、江州へ配流される宋江に対し、「你如今此去，正從梁山泊過，倘或他們下山來刼奪你入夥，切不可依隨他，教人罵做不忠不孝。此一節牢記於心」（第三十六回）と梁山泊入りを固く戒める。「孝」なる宋江は、晁蓋に強引に山へ迎えられても、「如哥哥不肯放宋江下山，情願只就兄長手裏乞死！」と言い、死んでも父の教えに従おうとする。結局、江州で処刑されるところを梁山泊の一行に救出されて仲間入りはするが、その後も「若爲父親，死而無怨」（第四十二回）と言って命がけで父を迎えに行こうとする。このように宋江は、『水滸伝』の少なくとも前半においては、一貫して「孝」なる人物に描かれているのである。また、宋江の江州配流から梁山泊一行の帰還までの間に、新たに戴宗・李逵ら十八名の好漢が登場し、いずれも仲間入りしているから、宋江の「孝」が物語の展開において果たす役割の大きいこともわかる。

そして、入山以降の宋江がひたすら招安を願うのは、賊徒を「不忠不孝」とみなす父に対して「孝」を尽くすためと解される。とすれば、国家に対する「忠義」を唱えるのも、彼の「孝」より発したことと説明できよう。招安を受けた後、宋太公は「再回鄆城縣宋家村，復爲良民」（第八十三回）し、亡くなると「衣錦還鄉」（第九十九回）した宋江によって手厚く葬られる。さらに宋江自身が「忠義」を全うして最期を遂げることで、「孝」の物語は完結するのである。

宋江の「義」については、作中で「孝」以上に強調されている。宮崎市定氏が「大いに義侠心が深くて、天下にその名が知れわたり、どんなあばれ者でも、宋江の名を聞けば、ひたすら恐れいってその前にひれ伏すほど」[14]と述べるとおりだが、「その義侠心とはどんなものかと見れば、せいぜい貧乏人には金銭をめぐみ、博奕打ちから金を何べんたかられても怒らないくらいの程度のものである」と軽くみることはできない。

平生只好結識江湖上好漢，但有人來投奔他的，若高若低，無有不納，便留在莊上館穀，終日追陪，並無厭倦；若要起身，盡力資助，端的是揮霍，視金似土。人問他求錢物，亦不推托。且好做方便，每每排難解紛，只是賙全人性命。如常散施棺材藥餌，濟人貧苦，賙人之急，扶人之困，以此山東、河北聞名，都稱他做及時雨，却把他比的做天上下的及時雨一般，能救萬物。（第十八回）

右に「但有人來投奔他的，若高若低，無有不納」云々というのは、前掲の美文にあった「聲名不讓孟嘗君」に応ずるものである。豪農の子にすぎない宋江の財力は、「食客數千人」（『史記』孟嘗君列伝）を養っていたとされる孟嘗君に及ぶべくもないはずだが、身を寄せてくる者があれば誰でも喜んで受け入れるということを繰り返しているうちに、比類なき名声を得たと解しうる。加えて、金を惜しみなく人助けに使ったというわけだが、この点に関しては、物語中の場面に大した話がないとしても、直接描かれない宋江の善行が登場以前に多々あったがために、これほど評判が高かったと読むべきであろう。

物語中にも、宋江の「義」があらわれる場面はもちろん存在する。

宋江聽罷，吃了一驚，肚裏尋思道：「晁蓋是我心腹弟兄，他如今犯了迷天之罪，我不救他時，捕獲將去，性命便休了。」心內自慌。（第十八回）

緝捕の何濤から話を聞き、兄弟分である晁蓋の危急を知った宋江は、慌てながらも命を救おうと思案する。そして、何濤を待たせて時を稼いでいる間に、晁蓋の屋敷へ馬を飛ばすのである。自らも巻き添えになることを覚悟しなければできない行動で、晁蓋に「我捨着條性命來救你」と告げるのも決して大袈裟ではない。また、この一件が物語全体において重要な位置を占めていることについては、説明を要しないであろう。

ここで、宋江が「卑劣陰険」とされる場面にもふれておこう。高島氏は、「宋江の行為のなかで最もきたない、水滸伝読者の誰もが唾棄するのは、第五十一回、朱仝を仲間にひっぱりこむために、四歳の男の子を殺すところであろう」と述べている。たしかに残忍で救いのない話なのだが、当の朱仝の反応をみるかぎり、どうやら好漢たちの論理においては、宋江の行為はさほどとがめられるべきものとならないようである。

柴進道：「……宋公明，寫一封密書，令吳學究、雷横、黑旋風俱在敝莊安歇，禮請足下上山，同聚大義。因見足下推阻不從，故意教李逵殺害了小衙內，先絕了足下歸路，只得上山坐把交椅。吳先生、雷兄，如何不出來陪話？」只見吳用、雷横從側首閣子裏出來，望着朱仝便拜，說道：「兄長，望乞恕罪！皆是宋公明哥哥將令分付如此，若到山寨，自有分曉。」朱仝道：「是則是你們弟兄好情意，只是忒毒些箇！」柴進一力相勸。朱仝道：「我去則去，只教我見黑旋風面罷。」柴進道：「李大哥，你快出來陪話。」李逵也從側首出來，唱箇大喏。朱仝見了，心頭一把無明業火高三千丈，按納不下，起身搶近前來，要和李逵性命相搏。（第五十一回）

右において、柴進が宋江の密書に始まる経緯を明かし、呉用・雷横が謝罪したのに対し、朱仝は「忒毒些箇！」と抗議するものの、「是你們弟兄好情意」として半ば受け容れているようにみえる。その後に朱仝が怒りの矛先を向けるのは、小衙内殺害の実行犯にしてまったく謝る素ぶりなどみせない李逵だけである。また、一連の作戦を指令したのが宋江であることは明らかだが、密書の内容は「禮請足下上山，同聚大義」までであって、小衙内殺害は現場の判断によるものと解する余地がある。そうであれば、後に宋江が朱仝に直接謝罪して、「前者殺了小衙內，不干李逵之事，却是軍師吳學究因請兄長不肯上山，一時定的計策」（第五十二回）と説明し、さらに、李逵の行為は「軍師嚴令」（同）によるものだった、と発言しているのと合致する。つまり作中では、宋江が残虐行為の全責任を問われることとならないように、逃げ道が用意されているのである。

だからこそ卑劣陰険なのだとも捉えられるであろうし、謀略を得意とする呉用や人殺しを好む李逵といった物騒な連中を派遣する以上、残忍な事件が起きるのを予見できないはずがない、ともいえる。しかし、ここで問題にしているのは、あくまで『水滸伝』が宋江をどのように描くのかである。山賊になるのを拒む好漢に対して、残忍な計略を用いて退路を断ち、強引に仲間入りさせる話としては、他に秦明の例があるが（第三十四回）、そこでは花栄が「教小嘍囉飽吃了酒飯，只依着我行。先須力敵，後用智取。如此如此，好麼？」と一連の策を立て、宋江はそれに賛同したかたちとなっている。三日前には「小弟只是一勇之夫，却無兄長的高明遠見」（第三十三回）などと宋江に語っていた花栄が、俄に知略をめぐらせたことになるが、この点からも、『水滸伝』は宋江に極力きずをつけないよう配慮していることがうかがえる。

以上、宋江については、梁山泊の首領らしからぬものとみたり、馬

琴のように作中における性質の変遷を考えたりするのではなく、おおむね一貫して善良な人物と捉えられることを述べた。

さらにいえば、宋江は「いたって常識的な現実主義者」[15]などではなく、むしろ眼前の現実を無視して「忠義」を唱える理想主義者とみるべきであろう。その点は、たとえば次の場面に顕著である。

宋江大喜……。宋江與衆人道：「我每受了招安，得爲國家臣子，不枉吃了許多時磨難，今日方成正果。」吳用說道：「論吳某的意，這番必然招安不成。縱使招安，也看得俺們如草芥。等這廝引將大軍來到，教他着些毒手，殺得他人亡馬倒，夢裏也怕，那時方受招安，纔有些氣度。」宋江道：「你們若如此說時，須壞了『忠義』二字。」林沖道：「朝廷中貴官來時，有多少裝么。中間未必是好事。」關勝便道：「詔書上必然寫着些諕嚇的言語來驚我們。」徐寧又道：「來的人必然是高太尉門下。」宋江道：「你們都休要疑心，且只顧安排接詔。」（第七十五回）

一度目の招安の使者として陳宗善が派遣されたことを知り、宋江は手放しで喜ぶが、呉用らは朝廷側の姿勢が受け容れがたいものであろうと予見する。結果はことごとく宋江以外の者たちの言うとおりになるのだから、彼らの方が常識的なのであって、宋江のみが「忠義」という理想をひたすら求めているのである。そして、そのような理想主義者こそが主人公にふさわしいといえるのではないか。『三国志演義』の劉備や『西遊記』の三蔵法師にも、同様に理想主義的なところがある。劉備のように血統というカリスマ性をもつわけでも、三蔵法師のように取経僧という無二の存在でもない分、宋江には好漢たちを平伏させるだけの比類なき道徳性が必要とされたと考えられる。

三

宋江を中心人物として、『水滸伝』は何を語るのか。再び馬琴の『半間窓談』を引いてみよう。[16]なお、引用文中の「前傳」は、『水滸後伝』に対して『水滸伝』をいう。

……宋江等、前傳に、死するもの四十許人、竟に後榮あることなく、みな奸臣に陷れられて、果敢なく枉死したりしは、中ころ魔行の悪報にて、亦是勸善懲悪の、作者の用意こゝにあり、宋江等百八人、忠義を盡して賞を得ず、過半王事に死したればこそ、舊悪竟に消滅して、忠信義烈虚名にならず、世々看官に惜しまるゝが、前傳作者の本意也、（評六）

先にみた「初善中悪後忠」にもとづいて、馬琴は『水滸伝』の結末に関して右のように説明している。疑問のある部分は小さくないが、やはり『水滸伝』全体を捉えた見解として評価すべきであろう。

まず、「死するもの四十許人」というのはどのような人々を指すのか、判然としない。「奸臣に陷れられて、果敢なく枉死したりし」者に該当するのは宋江・盧俊義のみで、宋江に道連れにされた李逵や自ら殉じた呉用・花栄を加えても五名にしかならない。一方、方臘討伐の間の死者を数えるとすれば、戦死者だけでも五十九名にのぼるから、ここには何らかの誤りがあるらしい。

次に、「勸善懲悪の、作者の用意」をみているのは、馬琴の小説観を『水滸伝』にあてはめようとしたものといえるが、強盗集団の活躍を中心とする物語に「勸善」の意図を見出すのはもとより困難であろう。そのためか、宋江らの横死を「悪報」とみた点までが閑却されてしまっ

たようである。

たとえば森槐南は、「水滸傳が出來た趣意」について次のように言及している。[17]

……馬琴が因果話にして、宋江等は盗賊や人殺しをした應報で、朝廷のために力を出しても、尙非命に終り、又は毒殺せられるといふ樣に說き明したのも、隨分可笑なことをくつゝけたものだと思ひます。要するに水滸傳は、設し此の如き一團體あつて天下を經營せば、經營することが出來やうに朝廷は之を用ゐぬ、又後に用ゐても、兎盡きて狗煮らるといふ始末になつた、世の中は不平なものであるといふことを小說に書いたとすれば、一番眞に近いやうです。

槐南は馬琴の說明を一笑に付しているが、実は『水滸伝』のかなりの部分は因果応報[18]で說明がつく。梁山泊の豪傑たちは如何に有能な者であっても、その多くが強盗や殺人といった悪事に手を染めている。善良な宋江といえども例外ではなく、すでにふれたように閻婆惜殺害の罪を犯している。作中さまざまに弁護されているが、殺人は殺人であり、「舊惡」にはちがいない。彼らが非命に斃れていくのはおかしな話ではなく、何の報いも受けずに「天下を經營」する話になっていたとすれば、その方がおかしい。

したがって、「世の中は不平なものであるといふこと」を『水滸伝』の「趣意」とみることはできない。ただし、『水滸伝』に「不平」が描かれていないわけではない。その「不平」とは、宋江らが終わりをよくしないことよりも、悪において彼らのはるか上をゆく大臣たちが朝廷に用いられたまま団円をむかえることなのではないか。

その点は後に詳しく述べるとして、ここでは『水滸伝』における因果応報について確認したい。まず、次の詩をみよう。

宋江重賞陞官日，方臘當刑受剮時。善惡到頭終有報，只爭來早與來遲。（第九十九回）

謀叛人方臘の処刑をうたったもので、討伐の功により手厚い恩賞を得た宋江と対比し、「善悪到頭終有報」と表現している。因果応報という考えかたが『水滸伝』に存在したことがわかる。

そして、次のような人物のありかたは、『水滸伝』が少なくとも部分的には因果応報を構想していたことをうかがわせるものである。

只有朱仝在保定府管軍有功，後隨劉光世破了大金，直做到太平軍節度使。（第一百回）

朱仝は梁山泊第十二位の好漢である。右に「只有」とあるように、方臘討伐から生還し官職を授けられた者で唯一、さらなる昇進を遂げている。朱仝が「王事に死した」る者たちと異なるのは、「舊惡」がみあたらないことである。

物語に初めて登場する時点では、済州鄆城県の「巡捕都頭」二名のうち、「馬兵都頭」として四十名の兵を率いる隊長にすぎないが、

身長八尺四五，有一部虎鬚，髯長一尺五寸，面如重棗，目若朗星，似關雲長模樣，滿縣人都稱他做美髯公，原是本處富戶，只因他仗義疏財，結識江湖上好漢，學得一身好武藝。（第十三回）

という傑物として描かれている。「仗義疏財」「結識江湖上好漢」は、いずれも宋江と共通して用いられる表現である。また、関羽に擬えた表現は、右に続く美文で「義膽忠肝豪傑，胸中武藝精通，超羣出衆果英雄。……雲長重出世，人號美髯公」と発展している。まさに非の打ちどころのない武人の姿といってよい。

梁山泊集団に加わる経緯も、朱仝は他の者たちと大いに異なる。機転をきかせて晁蓋や宋江の逃亡を助け、自身が罪人となっても相役の雷横を救うなど、「義」に厚い朱仝は宋江らから仲間入りを熱望される。そして、先にみた残忍な計略で退路を断たれたことから、やむなく彼らの意に従うのである。林冲らのように自らの意思で梁山泊に入ったわけでも、関勝らのように梁山泊討伐に失敗し降伏したわけでもない。そして入山後も、武人としての活躍は描かれるが、非難に値する行為は一切みえないのである。

この朱仝だけが異例の大出世という結末をむかえるのは、因果応報の理によって説明すべきものであろう。

四

『水滸伝』の物語に因果応報を認めるとすれば、宋江らが「過半王事に死したればこそ、舊悪竟に消滅して、忠信義烈虚名にならず、世々看官に惜しまるゝ」と馬琴が述べたことは見直されなくてはならない。しかし、前掲の馬琴の評論に対しては、当時から次のように重大な疑義が呈されていた。[19]

ある人この批評を見て、予にいひけるやう、……梁山一百八人にのみ、その舊悪の應報ありて、那(カノ)奸臣等にその事なきは、便是前傳の、作者の脱落(スカリ)といはまくのみ、かくても深意あるやと問ひしに、……

（評七）

『水滸伝』は、四賊とよばれる奸臣たちが誰一人として悪報を受けないまま団円となる。この点が、槐南をして「世の中は不平なものである」といわせたのであろうし、『水滸後伝』その他の続編が制作される動機にもなったと考えられる。[20]

右の問いに対し、馬琴は次のように答えている。

抑蔡京童貫高俅楊戩等の奸臣は、皆是宋書[21]に載られて、榮枯賞罰分明なるを、讀書の人はみなよく知れり、こゝをもて前傳に、他(カレ)等がひとしく罪せられし、趣までは写さぬ也、……彼蔡京高俅も、竟に終りをよくせざりし、……その事の趣は、宋史に譲りて写さぬが、迺(スナハチ)作者の俗ならざる、亦是一大趣向也、今世間の草紙の如く、をさをさ婦幼に見せんとて、作らざりしを會得せば、そこらの疑ひ氷解すべし、

（同）

奸臣たちが「竟に終りをよくせざりし」ことは、史書に記載され読書人に知られているから『水滸伝』は記さなかったのだ、という。『水滸伝』の対象が「讀書の人」であったとは考えられないものの、仮に奸臣の末路が読者周知のことであったとすれば、作中にみえない点はたしかに説明がつく。

しかし、四賊のうち、相応の悪報といえる内容が『宋史』に記載されている者は、蔡京[22]・童貫[23]のみである。高俅については、開府儀同三司の高官にあったまま没したことがみえる。[24]没後に官を削られた程度では、悪役の最期に似つかわしくない。楊戩にいたっては「宣和三年

戩死。贈太師吳國公」[25]とあり、作中にあてはめれば第八十回以前に没していることになる。第一百回では宋江や盧俊義を毒殺する計略の発案者となっているが、史実では終わりをよくしたようである。

以上により、馬琴の説明には無理があることがわかった。けれども、読者周知の事実をふまえて『水滸伝』の団円を説明しようとする馬琴の案は、参考になるのではないか。

前節にみた朱仝の後日譚には、「在保定府管軍有功，後隨劉光世破了大金」とあった。また、方臘討伐後に御営兵馬指揮使となった呼延灼も、「後領大軍破大金兀朮四太子，出軍殺至淮西陣亡」（第一百回）と記されている。これらによれば、『水滸伝』の団円は、後に対金戦が行なわれるという事実に連続するものとして構想されていることになる。さらに、金の将「兀朮四太子」（完顔宗弼）の名や、戦場として「淮西」の地名が呼延灼の後日譚に用いられていることなどから、金が華北を支配下におさめた頃までの事実を含む構想であったとも考えられる。とすれば、靖康の変や宋の南遷といった、おそらく『水滸伝』成立当時の読者にも周知されていたであろう大まかな事実をふまえて、奸臣たちの結末を説明することが許されるのではないか。

悪事を重ねてきた高俅ら四賊は、宣和六年（一一二四）、ついに宋江を毒殺するが、奸臣たちは処罰を免れる。ここまでが第一百回の内容である。その後の事実としては、宋は失政を重ねて宣和七年から金の侵攻を受け、一度は講和するが、結局靖康二年（一一二七）に首都開封が陥落、徽宗・欽宗の二帝が捕虜とされるなど亡国の憂き目に遭う。その間わずか三年だが、詳細はともかく、徽宗の末年に金が華北へ侵攻し悲劇的結末にいたったことはよく知られていたであろう。つまり、『水滸伝』の作品世界において、奸臣たちは間もなく国を滅ぼした、と語られているに等しいのではないか。彼らには、間接的に筆誅を加えるかたちがとられているのである。一方で宋江ら梁山泊集団は、作中すでに解体されているため、亡国の事実に関与しないことになっている。

五

前節に述べたところに大過がないとすれば、『水滸伝』は、宋の亡国直前に一時の輝きを放った好漢たちの物語として作られている、ということになる。そのことを裏づけるとともに、作品世界のありかたを明確にあらわすのが、次の一節である。

> 且說宋朝元來自太宗傳太祖帝位之時，說了誓願，以致朝代奸佞不清。至今徽宗天子，至聖至明，不期致被奸臣當道，讒佞專權，屈害忠良，深可憫念。當此之時，却是蔡京、童貫、高俅、楊戩四個賊臣，變亂天下，壞國壞家壞民。（第一百回）

歴史上において、徽宗（在位一一〇〇～一一二五）は蔡京・童貫らを信任して失政を重ね、亡国をまねいた責めを免れえない皇帝である。ところが『水滸伝』は、徽宗が「至聖至明」であるにもかかわらず、「不期致被奸臣當道，讒佞專權，屈害忠良」という事態になっているのだと語る。関勝が「主上昏昧」（第六十七回）と言うような場面もあって、必ずしも作中人物の共通認識ではないことがわかるが、徽宗を「至聖至明」とする表現は、右の地の文に加えて宋江や呉用の発言にもみえる（第七十一回・第八十五回）。こちらが『水滸伝』の基本認識と捉えられよう。

そして、英明なはずの徽宗が奸臣の跋扈をおさえられなかった原因

として語られるのが、右の傍線部「自太宗傳太祖帝位之時，說了誓願」である。上に述べてきたように、この部分は作中において重要な意義を有するはずだが、日本語訳の諸書をみるかぎり、十分に検討されてこなかったと思われる。

『通俗忠義水滸伝』では「大祖武徳皇帝ヨリ今ニ至ツテ朝廷ニ奸佞ノ臣多シ」[26]とかなり省略されており、また「大祖」の傍訓を「タイソウ」と誤っている。久保天随『新譯水滸全傳下巻』は「太宗、太祖の帝位を傳へし時、誓願を述べて即位せられければ」[27]と適切に訳しているが、「誓願」の内容にはふれていない。幸田露伴『國譯忠義水滸全書下巻』にいたっては、「太宗、太祖の帝位を傳ふるの時より、誓願して以て朝代奸佞清まざるを致すを說了し」[28]と明らかに誤読している。

現代の訳書では、「誓願」について次のような説明がなされている。

ここでは宋室の文官尊重の誓いをいう。太祖は宰相の趙普の説を用いて、文治政策を実行し、地方の兵権を抑圧した。太祖のあとをついだ太宗にも、趙普は文治政策を断行させ、中央集権の実をあげたが、半面、兵権の抑圧は国防力を弱め、外敵に対しては絶えず屈辱外交をとらざるを得なくなり、また文官の偏重は派閥の争いを盛んならしめて、いわゆる奸臣を跋扈させるにいたった。

（駒田信二氏訳、初出一九七二年八月）[29]

「太宗が太祖の帝位を伝えたとき、誓いを立ててから……」とは、宋の太祖・太宗の母が太祖に帝位を太宗に譲るようにいい、太祖が誓いを立てたことをさすのであろう。その無理から、太宗の系統が北宋で絶え、南宋は高宗以下、太祖系になったという。（中略）それと同じように、北宋が奸臣に毒されたという説もあったのであろう。

（清水茂氏訳、一九九一年一二月）[30]

さて、宋王朝はもともと太宗（第二代皇帝）が太祖から帝位を受け継いだときに、〔文官重視の〕誓いを立ててから、……

（井波律子氏訳、二〇一八年一月）[31]

「誓願」の内容を、駒田氏と清水氏はまったく異なるものと解していることがわかる。井波氏は前者の説によって訳語を補っているが、本稿の筆者はいずれも従いがたいものと考える。

まず、駒田氏のいう「文官尊重」は、「誓願」を要することではなく、単なる政策にすぎないのではないか。また、それを奸臣跋扈の遠因とする歴史的な説明は成り立つかもしれないが、『水滸伝』が作中においてそのようなわかりにくい語りかたをしたとは思われない。それでは、文官の「太師」蔡京はともかく、高俅・楊戩が武官の「太尉」[32]でありながら優遇される点を、読者は疑問とせざるをえない。童貫の「樞密使」は、宋代では文官が任用される職であったが、自ら元帥となって梁山泊討伐に赴くなど、作中ではやはり武官とみられる。

一方、清水氏の説明は理解に苦しむものである。原文でも清水氏の訳でも、「誓願」をしたのは太宗と読めるのだが、太祖が太宗に譲ることを誓ったと解するのであろうか。太宗の即位に関しては正常な継承でなかったとする疑いがかけられており[33]、そこに太宗系断絶の原因を求めるというのは後世の史観においてありうるが、帝室が正統性を欠くことと「奸臣に毒され」ることとを結びつけるのは、作中の語りとしては無理があろう。なお、高宗は徽宗の第九子であるから、太宗の系統は南宋の初代高宗をもって絶え、二代孝宗以下を太祖系とするのが正確である。

そもそも両氏の説では、『水滸伝』において、英明とされる徽宗すら奸臣の跋扈を許してしまった原因がこの「誓願」に求められている、という点が考慮されていない。徽宗の奸臣に対する態度は、たとえば次のように描かれている。

天子大怒，喝道：「汝這不才奸佞之臣，政不奏聞寡人，以致壞了國家大事。……都是汝等嫉賢妬能之臣，壅蔽不使下情上達，何異城狐社鼠[34]也。汝掌管樞密，豈不自慚。本欲拿問，以謝天下，姑且待後。」喝退一壁。童貫默默無言，退在一邊。……百官朝罷，童樞密羞顏回府，推病不敢入朝。高太尉聞知，恐懼無措，亦不敢入朝。（第八十二回）

徽宗は童貫・高俅の梁山泊討伐失敗の顛末を知り、朝賀の場で詰問しても言い逃れようとする童貫を、右のとおり、極めて激しい言葉を用いて叱責する。これをうけて両名は「不敢入朝」というから、その間に梁山泊集団の招安が果たされたと考えられる。ところが、「四個賊臣設計，教樞密童貫啓奏，將宋江等衆要行陷害」（第八十三回）とあるように、しばらく出仕を控えただけで彼らは復帰し、再び奸計をめぐらせているのである。ここでも徽宗は、童貫らを「大罵」するが、結局は「姑恕情罪，免其追問」ということになる。現代の感覚からすれば、奸臣たちに何か弱みでもにぎられているのではないか、と思ってしまいそうな為体である。

『水滸伝』の徽宗は、なぜ奸臣を処断できないのか。本稿の筆者は、太宗の「誓願」のなかに答えがあると考える。

六

藝祖受命之三年，密鐫一碑，立于太廟寢殿之夾室，謂之誓碑。用銷金黃幔蔽之，門鑰封閉甚嚴。因勑有司，自後時享，及新天子卽位，謁廟禮畢，奏請恭讀誓詞。是年秋享，禮官奏請如勑。上詣室前，再拜陞階。獨小黃門不識字者一人從，餘皆遠立庭中。黃門驗封啓鑰，先入焚香明燭，揭幔，亟走出階下，不敢仰視。上至碑前再拜，跪瞻默誦訖，復再拜而出，羣臣及近侍，皆不知所誓何事。自後列聖相承，皆踵故事，歲時伏謁，恭讀如儀，不敢泄漏。……靖康之變，犬戎入廟，悉取禮樂祭祀諸法物而去。門皆洞開，人得縱觀。碑止高七八尺，闊四尺餘，誓詞三行。一云柴氏子孫有罪，不得加刑。縱犯謀逆，止於獄中賜盡，不得市曹刑戮，亦不得連坐支屬。一云不得殺士大夫及上書言事人。一云子孫有渝此誓者，天必殛之。

（『避暑漫抄』[35]所引「秘史」）

右に引いたのは、いわゆる太祖誓碑に関する記事である。これによれば、太祖が秘かに誓詞を刻した碑を宮中奥深くに立て、歴代皇帝は誓いを継承していったが、その内容は余人には伏せられていたという。靖康の変で皇宮が金軍に蹂躙された後、人々が初めて目にしたとされる誓詞の主な内容は、柴氏の子孫に罪があっても刑を加えないこと、朝廷に仕える者や意見書を献じる者を殺さないこと、の二点である。前者についても『水滸伝』の柴進との関係を考える余地がありそうだが、ここでは後者についてのみとりあげる。

「秘史」および『避暑漫抄』の資料性については不明の点が多く、誓碑の実在性に関しても疑問視されているようである。[36]しかし、本稿にとって重要なのは史実ではなく、『水滸伝』百回本の成立当時における

人々の認識である。たとえば『宋史』曹勛伝に、「藝祖有誓約藏之太廟，不殺大臣及言事官，違者不祥」[37]という徽宗の発言が記されており、前掲の「誓詞」と文言は異なるものの、大臣を殺してはならないとする内容などは重なっている。元代成立の正史が、「不殺大臣」の内容を含む太祖誓碑に言及している点に注意したい。

また劉浦江氏[38]は、遅くとも北宋の中葉には、「不殺士大夫」・「不誅大臣」が「祖宗之法」とみなされるようになっていたことを指摘している。実在したとしても秘されていたはずの太祖誓碑の内容が、部分的には「祖宗之法」という認識で知られていたわけである。皇帝が大臣を誅殺しないというのは、他の王朝にみられないことだが、それを始めた皇帝を太祖・太宗のいずれかに特定しないのが「祖宗」[39]という表現である。

ここで結論を述べれば、太祖誓碑と「祖宗之法」とが、「不殺大臣」という共通の内容をもつことから結びつき、「自太宗傳太祖帝位之時，說了誓願」という表現が生じたのであろう。大臣を殺してはならないとする「誓願」以来、歴代皇帝は奸臣を処刑できず「奸佞不清」という事態をまねいた。英明とされる徽宗も例外ではなく、奸臣たちは生き延びて悪事を重ね、物語の団円の後には国を滅ぼすこととなった。このように解釈してこそ、『水滸伝』百回本の物語を完結したものとして捉えられるのである。

ただし、右によれば、『水滸伝』は「誓願」について否定的に語っていることになる。南宋孝宗の時には、実際に次のような意見を述べる者があった。

> 國朝以來，過於忠厚，宰相而誤國，大將而敗軍，未嘗誅戮。要在人君必審擇相，相必當為官擇人，懋賞立乎前，誅戮設乎後，人才不出，吾不信也。
>
> （『宋史』史浩伝[40]）

「祖宗之法」では臣下への思いやりに厚すぎるとして、誅殺も回避すべきでないという。「不殺大臣」に関するこうした意見は早くからみられたわけで、「誓願」を亡国に連なる文脈で用いること自体はおかしくない。残る問題は、「太宗傳太祖帝位之時」と「誓願」の主体が太宗になっている点である。誓碑に関する資料によるかぎり、最初に「誓願」を行なったのは太祖とされていたはずである。

ところが、『水滸伝』は引首において、太祖を「自古帝王，都不及這朝天子」というほどの至高の存在に位置づけている。そこで、否定的に語られる「誓願」の主体を、先にふれたように正統性が疑問視されるむきのあった太宗へ変更したのではないか。あるいは、「祖宗之法」の「祖宗」という曖昧な認識が存在したことが、太祖から太宗への変更を促したのかもしれない。

いずれにしても、『水滸伝』は「柴世宗讓位與趙檢點登基」（引首）のように事実関係にとらわれないところがある。実際は、後周の世宗（柴栄）が没した後、幼年で即位した恭帝（柴宗訓）から宋の太祖（趙匡胤）への禅譲が行われている。「誓願」の主体を変更する程度であれば、特に問題とはならなかったのだろう。

注

（1）高島俊男氏『水滸伝の世界』（大修館書店、一九八七年一〇月。ちくま文庫版〈二〇〇一年一二月〉による）など。

（2）前掲注（1）書、十一「誰が水滸伝を書いたのか」。

（3）鵜月洋氏の翻刻・校訂（『国文学研究』六、一九五二年一〇月）による。

（4）『水滸伝』本文の引用は『容與堂本水滸傳』（上海古籍出版社、一

九八八年一一月）による。

（5）馬琴の「水滸三等観」の形成については、神田正行氏「『水滸伝』の諸本と馬琴」（『馬琴と書物―伝奇世界の底流―』〈八木書店、二〇一一年八月〉第二部第二章、初出二〇〇八年二月）参照。

（6）前掲注（1）書、二「総大将宋江」。

（7）『梁山泊』（中公新書、一九九二年一月）第五章「小役人宋江から大豪傑宋江へ」。

（8）井波律子氏訳『水滸伝』㈠（講談社学術文庫、二〇一七年九月）まえがき。

（9）前掲注（7）に同じ。

（10）小松謙氏『詳注全訳水滸伝』第三巻（汲古書院、二〇二二年七月）に指摘がある。なお、小松氏が同書解説に「『水滸伝』を素直に読む限り、宋江の印象はそれほど悪いものではない」と述べているのはまったく同感だが、「筆者は宋江が首領となる理由は『水滸伝』の中に十二分に書き込まれていると考えるものであるが、この点については次巻の解説に譲りたい」とのことで、続刊を俟ちたい。

（11）前掲注（10）書。

（12）小松氏は後漢・三国期の尺度（一尺は二三～二四センチメートル）を用いたものと推定している（『詳注全訳水滸伝』第一巻〈汲古書院、二〇二一年八月〉一四二～一四三頁）。ちなみに、『水滸伝』の登場人物では郁保四らが「身長一丈」（第六十八回）で最も高い。

（13）前掲注（6）に同じ。以下同じ。

（14）『水滸伝―虚構のなかの真実―』（中公文庫、一九九三年一二月。初出一九七二年八月）、以下同じ。なお、そうした「あばれ者」の典型的な例といえるのが張横である（第三十七回）。

（15）前掲注（8）に同じ。

（16）前掲注（3）に同じ。

（17）『めさまし草』巻之二十（めさまし社、一八九七年八月。複製版〈臨川書店、一九六八年六月〉による）。和漢の古典についての合評を連載した「標新領異録」で『水滸伝』をとりあげており、そのなかで三木竹二が槐南の談話として述べた部分。

（18）本稿では物語内での完結性を問題にしており、輪廻を伴なう仏教的な観念をいうわけではない。この点、念のため断っておく。

（19）前掲注（3）に同じ。

（20）『水滸後伝』について、馬琴は「那奸（カン）臣等が謫罰の趣をよく写して、人意を快くせし」ものと述べている（『半間窓談』評七）。

（21）「宋書」とあるのは、下文の「宋史」の誤りではなく、広く宋代のことを記した書物をいったものであろう。

（22）列伝第二百三十一・姦臣二。

（23）列伝第二百二十七・宦者三。

（24）『宋史』に高俅の伝は立てられていないが、欽宗本紀靖康元年五月己卯条に「開府儀同三司高俅卒」、同辛巳条に「追削高俅官」とある。なお、引用は省いたが、馬琴の評に「高俅は徽宗北迁のとき、沙漠へ赴きたるよし、宋元通鑑に見えたり」との注記がある。しかし、それは『宋史』の時系列に整合せず、『宋元通鑑』にも記事を確認できなかった。

（25）前掲注（23）に同じ。

（26）巻之四十七、一七九〇年刊。訳者は不明だが、曲亭馬琴は「七十回以下は安永中俳諧師可因か訳せしといふ可因は俳諧師なから稗史学を好みて水滸伝も三四本蔵弆せしを見たりと亡兄いへり」という（『水滸伝考』補遺、佐藤悟氏の翻刻〈『実践国文学』五二、

一九九七年一〇月）による）。

(27)『新譯漢文叢書』第十編（至誠堂書店、一九一二年二月）。

(28)『國譯漢文大成』文學部第二十卷（國民文庫刊行會、一九二四年一〇月）。

(29)『水滸伝』8（ちくま文庫、二〇〇六年二月）四二八頁注一による。

(30)『水滸伝』第十三冊（岩波文庫）あとがき三七五～三七六頁。

(31)『水滸伝』(五)（講談社学術文庫）六一一頁。

(32) 小松氏は前掲注（12）書で「『水滸傳』における太尉は高位の武官が帯びる肩書きである」と述べている。

(33) 竺沙雅章氏『独裁君主の登場　宋の太祖と太宗』（清水書院、二〇一七年八月）。

(34)「城狐社鼠」を清水氏は「獅子身中の虫」と訳している（『水滸伝』第十一冊〈岩波文庫、一九八三年年六月〉）。

(35)『叢書集成』初編（中華書局、一九八五年）。

(36) 劉浦江氏「祖宗之法：再論宋太祖誓約及誓碑」（『文史』二〇一〇年第三輯、同年八月）参照。以下、同論文から得られた知見によるところが大きい。なお管見のかぎり、前掲注（33）書ほか、近年の日本における宋代史の概説書等では誓碑にふれたものがないようである。わずかに陳舜臣氏『中国の歴史　第八巻　宋とその周辺』（平凡社、一九八二年二月）は、活発な言論を促したものとして「石刻遺訓」を高く評価している。

(37) 列伝第一百三十八。

(38) 前掲注（36）論文。

(39) たとえば、前掲注（36）論文は『続資治通鑑長編』巻一百四十五・慶暦三年十一月壬午条に「祖宗以来，未嘗輕殺臣下，此盛德之事，奈何欲輕壞之」という記事をあげている。

(40) 列伝第一百五十五。